

七 覺めよ醒せよ迷の夢を

盥をかぶつて市に行く女がありました。道々思ふやう、この盥には卵がある、之を賣つたら、どつさりお金が儲けられる。それで鶏を買ふ、卵を賣る、お錢がたまる、それで羊を買ふ。羊が子を産む、乳を出す。子を賣る、乳を賣る、羊よりも牛がよい。みんなを賣つて牛をどんと買ふ、子を賣る、乳を賣る、肉を賣る。甘いぞ、さうするとお金がウンと出来る。出来たお錢で、着物を買ふ、家をよくする、倉を建てる。すると四方八方から婿入の申込がある。茲許一つ氣取つて、彼方も臂鐵砲、此方も臂鐵砲。それでも寄つてたかつて袖を引く。その時は嬉しいわと、覺えず手を振つて躍つた拍子に頭の盥が轉んで、中の卵がぐざり。ア、ア。

橋慢の頂には報謝の花開かず、懈怠の谷の底には法悦の光至らず。橋慢の人は須らく悔悟すべく、悔悟の人は宜しく橋慢を捨て空想を離れて、着實に勤勉せねばならぬ。

春の暖かい日に汐干狩。只一人手籠さげて出かけた男。汐はずつと引いて廣いく干潟。段々貝を拾つて行く中、砂の中に光るものがある。掘つて見れば、こは如何に、大判小判金貨ばかりが、底知れず埋まつてある。掘れば掘るだけ出て来る。籠も袂も懷も金貨一ぱい。歸らうとしても身動が出来ぬ位。さて困つた、此儘に捨てるも惜しい、車を持つて来て皆拾つてやらう。又々元の通りに金を納めて、人に知られぬやうと砂を被せたが、今度来る時場所を忘れてはならぬ。目標に砂を高く盛つたが、そこらに砂盛はある。竹を立てやうか、矢張り他に竹も立つて居る。よしそれなら大丈夫、人も避ければ目標にもなると、お尻をまくつて脱糞一つ。ウンと氣付いて目が覺めたら、汐干狩ならぬ床の中。貝も金貨も消えて、残つたのは正味の糞ばかり。

金拾ふ夢は夢にて、夢の中、糞すると見し夢は眞夢

わらひばなし

笑話ではない。實際人の世は、この糞の跡始末に困つて居るのでなからう

か。高い塀の中で丈夫な格子住居もこれならば、借金で頭痛鉢巻もこれ。こ

れではならぬと悔悟めしたら、セッセと勤勉遊ばせ。かけた襷の切れる程。